

新しい時代に対応した私立小学校の在り方

大 森 隆 實（一般財団法人日本私学教育研究所）

1. 本研究の目的と内容

昨年度は今年度とテーマを同じくして全国の私立小学校にアンケート調査を行った。その結果は報告書にまとめ200余校に贈らせていただいたところである。「創立時の精神を幾多の困難を乗り越えて、守り続けてきた私立小学校であるが、知識基盤社会といわれている今日、変わっていいものと変わってはならないものがあることを認識する必要がある。」 私立小学校経営研究会調査報告書-平成25年3月一般財団法人日本私学教育研究所-

上記は報告書のはじめにの項に書かれている。今年度は、このことを踏まえ、昨年度実施できなかった学校訪問を行い検証したいと考えた次第である。それにより私立小学校の在り方が多少なりとも解明出来れば幸いである。

2. 訪問校一覧

今年度は、復興支援「教師のためのカウンセリング研修会」「いじめ防止対応の研修会」「学校評価研修会」と東京以外の私立学校のための研修会が各地で行われたため、それらの地方にある私立小学校を訪問する機会を持つことができた。また、研究員が主催する研究会のメンバーとともに手分けして訪問調査することもラッキーだったといえる。毎年実施されている日本私立小学校東京地区教員研修会、同 西日本地区教員研修会に参加できたことも大きかった。2つの研修会は地区に所属するすべての私立学校を休校にして全教員が会場となる今年度の当番校となる立教小学校、同志社小学校に集まれる機会であり、そこで先生方の生の声を聴けるチャンスでもあった。それぞれの学校が、先生が抱える問題や課題を知ることできるし、解決のヒントなども交換できる、いい機会にもなった。

小学校名	校長名	所在地	定員
札幌三育	大河原一義	北海道札幌市北区択北4条	30
盛岡白百合学園	高橋 正子	岩手県盛岡市山岸	240
聖ウルスラ学院英智小学校	伊藤 宣子	宮城県仙台市若林区一本杉	480
仙台白百合学園	渡辺 瑞穂	宮城県仙台市泉区芝山	240
桜の聖母学院	川田紀美子	福島県福島市花園町	300
郡山ザベリオ学園	駒田 瑞穂	福島県郡山市大槻町字古屋敷	480
久慈川三育	山本 幹雄	茨城県日立市留町	24
目黒星美学園	滝口ひとみ	東京都目黒区碑文谷	720
聖ドメニコ学園	山崎 昭彦	東京都世田谷区岡本	480

立教	西村由紀夫	東京都豊島区西池袋	720
武蔵野東	木村 修二	東京都武蔵野市緑町	300
国立音楽大学附属	横澤 敬蔵	東京都国立市西	480
カリタス	萩原千加子	神奈川県川崎市多摩区中野島	648
同志社	奥野 博行	京都市左京区岩倉大鷲町	540
明治学園	松川 明子	北九州市戸畑区仙水町	900
南山大学附属	ハンスユーゲン・マルクス	名古屋市昭和区五軒屋町	540
長崎精道	牧山 涼子	長崎市三原	270
精道三川台	白根 聖矢	長崎市三川町	270

3. 私立学校の経営を考える

公立と私立の一番の違いは、教育費の無償と有償である。保護者の側から考えるとき教育費を払ってまで、子どもを入学させたいというメリットがなければ私立学校は存続しないといっても過言でない。従って、上記の学校を始めすべての学校とも、保護者や児童生徒のニーズに応えようと必死になっているのが現状といってよい。まして、小学校においては、公立校 22000 数校に対して私立は 200 数校しか存在しないのである。

私学の独自性といっても外への発信はおのずと、たかが知れているのである。さらには少子化の追い討ちがあり、学校経営は苦勞の連続といってもよい。そのような中でいかに内容のある教育を施すことができるか、が問題になる。

私学経営というと児童生徒をいかに集めるかが、その中心に置かれ、入り口と出口に目が向きやすいが、今、在学している児童生徒の真の幸せに焦点を当てて考えることも大切ではないか。安全で安心できる学び舎の構築が求められているのである。特に小学校においては義務教育を実施している学校種ということで、厳しい目が注がれるし、公立とどこが異なるのかといった目にさらされるのである。

学校創立時の理念を生かしつつ、社会や保護者のニーズに応えることは本当に並大抵なことではない。しかしながらこのような人を育もうといった高い理想を掲げて開校したことを念頭に置いて経営することは当然といってもよい、ことである。

4. 親はいま何を求めているのか

1. 子どもの幸せを願っての教育

保護者は、自分たちのことよりも子どもが幸せになることを願っている。親が子を大切に育てるように、学校でも子ども一人ひとりに愛をもって育んでほしいと願っている。教育というのは、一方的に教えれば、それを受けとめ、自然に対象となる者が成長するというものではない。教える、教わる関係がしっくりいっていなければ、いい結果は期待できない。今の子どもたちはひ弱で、また自己の欲求を抑えることができない。そのような中で、成長するのは大変なことなのである。

さらに、子どもが影響を受けやすい、大人社会のモラルの低下も著しいといわれる。大人の様子を考えると、地に足をつけて人生を見ることができず、利己的な価値観、単純な正義感、ときには虚構と現実の区別さえできない者さえ浮かんでくる。自分自身で考え、創造し自ら率先できる自発性と勇気、苦しみに耐える力、他人への思いやり、必要に応じて自制心を発揮する意思、それらのいずれもが今の大

人には欠けているのである。また、社会に希望を持って、社会には良い面と悪い面が同居するといった中で、適切に行動しなければならぬといったバランス感覚をも失っているように思える。

このような大人社会の中で子どもたちは日々生活しているのである。いくら子どもたちを正しい方向に導こうとしても、大人が変わらなければ、根本から変革を期待するのは難しいのである。

それでは親たちが考える幸せとはどのようなものなのか。名のある学校を卒業し、一流企業に就職し、結婚し家庭を築き、富を得て何不自由なく人生を歩むこと、と考えられがちだが果たしてそれで幸せといえるだろうか。

本当の幸せは、周りから認められ、信頼されて築かれるものだろう。そのためには沢山のことを学ばなければならないし、頭だけの学問ではなく、経験、体験を通して得た能力を駆使して、自ら学んで得た力が身につけていなければならない。試行錯誤して得たもの、汗を流して得た喜び、作られたものではなく自らの努力によって得た、解けた喜び、知った喜び、できた喜び等の積み重ねが求められる。さらには、学びと同じように求められている能力としてコミュニケーション力があげられる。少子化、核家族化によって人との関わり方が以前に比べ希薄になっている故、他人との関わりを大切に出来る人が望まれているのである。

まとめてみると、親の子どもに望む幸せとは、誰からも愛される人に成長することだろう。そのためには自分の周りにあるすべてを大切に、我慢することができ、人に譲ったり、自分のことのように他人の面倒を見たり、勿論沢山のことを学び、心身が健康で社会に役立つような人になることに他ならない。

2. 安全で安心できる学舎を目指して

震災に遭遇したり、いじめ問題が起こったり、誘拐や子どもに関わる事件が起きるたびに親の心配が増すこの頃である。いま、最も親の関心があるのは学校の安全安心ではないだろうか。そこで、子どもと親を分けてどんな事柄があるか挙げてみた。

①子どもの安全安心

- ・教室の中に一人ひとりの居場所があり、楽しく学べる
- ・周りの仲間から認められる存在
- ・学校、教室のルールを守ることによって安心できる場所
- ・在校生としての当然責任義務はあるが、同時に自由もある場所
- ・失敗を恐れることなく、自分の考えや発言ができる場

②親の安全安心

- ・子どもの良さを引き出してくれる場
- ・学校に対して、教師に対して全人格的成長が委ねられる。
- ・わかる授業、力の付く授業、人間形成の場としての充実した教育活動
- ・「行ってまいります」から「ただいま」まで委ねられる学校
- ・教師の当たりはずれがなく、学校としてのコンセンサスが浸透している

学校に対する期待は、学校の掲げる建学の精神の具現化はもとより、毎日行われている授業を中心とする教育活動を進める教師によるところが大きいことがわかる。学級経営、授業経営に対して費やす時間を第一に考え、今日より明日を大事にする雰囲気が大切になる。

5. 新しい時代に対応した私立小学校の在り方

全国の学校を訪問して感じたことは、どの学校も児童中心に教育活動が行われていることである。誰のための学校か、が教師集団に浸透していることがうかがえられる。公立学校の私学化といわれ、私学の経営が危ぶまれる向きもあるが、訪問調査した限りでは、そのようなことは見られなかった。在京委託研究員として小中の連携について研究を始めて、15年を数えるが、そのころと異なり教育現場は様変わりしてきたように感じる。一貫教育は私立学校の建学の精神に基づいて、校種を貫くそれであったものが、入試に向けての有利不利に変わり、公立校にも取り入れられるようになった。

私立学校の特色として永年育まれてきた一貫教育が、時代とともに様変わりしてきたようである。

そのような中で私学の独自性を発揮できるものとして、クローズアップされてきたものが、ヒドゥン・カリキュラムである。子どもたちは、教師の教えや学校生活、学校制度そのものの裏に潜み隠れているものを、教師の言語的なコミュニケーションに伴う表情とか語調・態度や教師が持つイメージや雰囲気などの非言語コミュニケーションを通して学び取ってしまうのである。学校の中ではそういった隠れたメッセージが子どもたちに伝えられていて、子どもたちは自覚的に非自覚的に規範とか価値、信念、知識やいろいろな性向などを隠れたカリキュラムの中で学び取っているのである。

小学校学習指導要領によって小学校で学ぶべきことが、内容はもとより、時数まで定められており、その中で私学の独自性を発揮するのは難しい技である。しかしながら、実際周りから認められるようなすばらしい教育をそれぞれの学校で実施しているのである。これらは教師の子どもに対する接し方であったり、数字に表れない伝統とよばれるものによるところが大である。外国語活動、生活科、総合の時間など私立学校が先駆者となって行ってきた教育が認められた結果いってもよいだろう。

これからも、今までと同じように今在籍している児童、彼らのバックボーンである保護者の満足を得られる教育を施すことこそ、私学に求められる道ではなかろうか。

先人の言葉を借りれば「私学は公教育プラスアルファ」を忘れてはならない。